

日本図の変遷

～赤水から伊能へ～

小野寺淳 平井松午

……20

線風景の「形容」（景観描写）には主には染色系の彩色が用いられた。伊能図でひととき目立つのは、地図接合の合印にも使われているコンパスローズⅡ同Ⅰである。羅針図とも呼ばれるコンパスローズはヨーロッパのポルトラノ型海図に用いられ、近世初頭には日本にも紹介されている。

伊能図は、測量データをもとに、縮尺三万六千分の一の測量下図、それらを繋ぎ合わせて寄図や大図の原因が作製され、さらに縮小して中図・小図の原因が編集された。

浄写（清図）用紙に針穴が開けられた測点箇所や望視地点を結んで、測線（大中小図）や方位線（中小図）が引かれた。

細密な伊能図－尊敬のこだわり

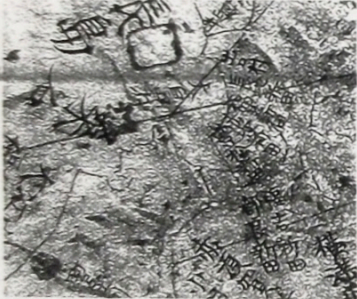
地図のスケールを問わず、測点の間隔はおおよそ二・五ミ前後で、狭いところでは〇・二・〇・五ミ前後。毛筆で書かれたカタカナ地名は米粒大に三文字表記、漢字地名も一字が二・五ミ角という細密さである。写真①。これらの測点には、城下町の「町界」や「村界」地点が含まれ、地図上の方位記号（コンパスローズ）や国名・郡名枠の四隅にも針穴が確認できる。

測線や方位線に朱線、測量沿

名普教授)

このように精緻な作図のために、製図用紙も厳選された。測量下図や寄図には保存・取り扱いが容易な常陸産の西ノ内紙、大図の下図（原図）には美濃紙が多用された。美濃紙も平滑・均質・薄口で、針突法による製図作業に適していた。幕臣や大名家への献上図には、竹紙（唐紙）が用いられた。繊維が緻密な薄口紙でやや黄色みがかった竹紙は、中国産の舶載品として社会的に珍重されていた。これにじみ止めの礬水（膠とミョウバンを混合した水溶液）を引いて献上図用の清図用紙に仕立てられた。

（ひらい・しよこ）徳島大



木曾川河口・桑名付近（中図）。東海道歴史紀州及中国至越前沿海図（上）（伊能忠敬記念館蔵、目盛は1cm）



半円形コンパスローズ。実測地図 壱岐大図（松浦史料博物館蔵、直径10.6cm）